

環境問題のトピックスの一つとして、生物多様性に対する注目が高まっています。日本政府は2007年に「第3次生物多様性国家戦略」を策定したほか、2009年には「生物多様性民間参画ガイドライン」を制定するなど、企業に対しても積極的な取り組みを求めています。ここで改めて、なぜ生物多様性の保全が重要なのかを見ていくと、そこには人材の多様性を高めることの意義にも通ずるものがあるように思われます。

生物多様性保全の重要性については、種が多く多様な生き物が存在することによって、食物連鎖や共生などを含めた生物同士のつながりが豊かで柔軟性に富んだものとなり、環境変動や人為的な攪乱に対する抵抗力が高まるということが理由の一つに挙げられます。また、様々な遺伝子を持つ個体が存在することで、新しい病原菌などに対抗できる、種としての生存力を備えるとともに、新しい環境に対応できる種の分化、進化の可能性を高めることができるとされています。

例えば、現在森の植物の85%以上を占める、花を咲かせる植物（被子植物）は、実は約2億5000万年前から始まる恐竜時代の終わり頃に現れて、世界はごく短期間に花で覆われたと言われています。花が咲き始めると昆虫が多様化し個体数が増え、それまで肉食だった恐竜たちの中から昆虫を餌にしようとするものが現れ、飛んでいる昆虫を食べるために飛ぼうとする恐竜が出てきて、鳥類の祖先になったのではないかという説もあります<sup>1</sup>。

このような生物学的な知見から見ると、企業の組織内においても、多様な個性や考え方をを持った人々が交じり合うことが、環境変化への対応力、抵抗力を高め、組織の創造性や革新性の発揮をもたらすといえるでしょう。企業が時代の変化を踏まえて新たなリスクに対応し、進化を続けていくためには、多様な人種、性別、価値観等を受け入れた従業員がいることが強みとなるわけです。

企業は、自然界の多様性保全への配慮と、組織内の多様性を高め活かしていくことの重要性を関連づけて考えることが大事ではないでしょうか。

---

<sup>1</sup>福井県立恐竜博物館館長 東 洋一氏「ビッグイシュー日本版」2009年10月15日号より